

機関番号：23903

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320056

研究課題名（和文）世界文学における混成的表現形式の研究—移民文学を中心に

研究課題名（英文）A study of mixed forms of expression in world literature — An international perspective on migrational literature

研究代表者 土屋 勝彦（TSUCHIYA MASAHIKO）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：90135278

研究成果の概要（和文）：各国言語圏文学における混成的な表現に着目すれば、それぞれの異郷者が持つ複数言語間のゆらぎ、きしみ、ズレに苦悩しつつも、それを新たな文学言語創造への果敢なる挑戦としてとらえ、閉ざされた「国民文学」を打破し、多言語の反響しあうインターカルチュラルな文学へと飛翔するパトスを見出すことができる。そこに従来の「移民文学」からオムニフォニックな交響楽たる「世界文学」へと架橋するひとつの視座を設定できよう。

研究成果の概要（英文）：Regarding the creole forms of expression in different language areas, a pathos can be found in which transnational authors are pained by the unsteadiness, the conflicts, the gaps and the deviances of these languages, but consider them as possibilities and goads for creating a renewed language of literature which would transcend the closed "national literature" and lead to intercultural literature with multilingual allusions. This can be recognized as the attitude of transforming migration literature into omniphonous world literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2009 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総 計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：越境文学、亡命文学、移民文学、クレオール、ハイブリディティ、世界文学、ポルダーランド、マイナー文学

1. 研究開始当初の背景

当研究グループは、平成 17 年度から平成 19 年度まで、基盤研究（B）として「越境する文学の総合的研究」というテーマのもとに、英語圏、ドイツ語圏、フランス語圏、日本語

圏の越境的な文学的営為を総合的に研究してきた。まず重要文献の収集と整理を行いつつ、緊密な連携の下に、共同研究会を定期的に行い、相互の主題の関連性を考慮しながら各々の研究テーマを掘り下げ考察してき

た。従来の各言語に限定された個別の文学研究ではなく、分野横断的、学際的な当研究によって、文学言語のクレオール性、脱領域性、ポストコロニアリズム、ナショナリズムへの抵抗という文化的諸問題にまで視野を拡大し、言語表現の新たな可能性を問い直し、「国民文学」を批判的に相対化しうる革新的なエクリチュールの在り方を探求することにより、従来の文学研究に新たな一石を投じる礎を築くことができた。以上の研究成果において残された課題として、移民作家や亡命作家の諸作品に見られる融合的・混成的表現形式の特質とその世界文学における意義を解明し、歴史文化的な背景と将来の方向性を考察することがさらに必要であるとの共通認識にいたった。

2. 研究の目的

本研究は、こうした個別研究の成果を世界文学の動向に照らしながら、各国文学の諸作家・作品における流動的自己表出（エクリチュール）のあり方を学際的・分野横断的に考察するものである。移動と離散のうちに複数文化の衝突と融合がはかられ、新たな言語表現へと結晶していくハイブリディティの文学様式を、各国の亡命文学や移民文学の変遷のうちに探求することは、ポストコロニアリズム時代における世界文学の潮流を考える上でも極めて重要である。具体的な研究対象として扱うのは、ドイツのトルコ系作家や東欧系作家、ロシアの亡命作家、英語圏の南米系作家、フランス語圏カリブ海作家、日本語圏欧米作家などである。言語は異なっているが移動と離散の運命を自らの意思によって担うこれらの作家たちがどのような問題意識を持って作品創造を行っているのか、その混成化された表現形式の特質はどのようなものか、そうした表現形式が居住国の文学にどのような影響を与えているのか、その融合的な言語表出によってどのような新たな文学的価値を持ち、文学界に寄与しているのか、その歴史文化的背景を探りつつ考察し解明する。

3. 研究の方法

移民作家たちや亡命作家たちの作品に見られる融合的・混成的表現形式の特質とその世界文学における意義を解明し、歴史文化的な背景と将来の方向性を考察するために、各研究担当者は緊密な連携の下に共同研究を行う。まずは資料収集・整理を継続しつつ、グループ間のネットワークを利用して、各種のシンポジウム、共同研究会を行っていく。まず、研究代表者の土屋はドイツ語圏の移民作家作品を中心に分析する。田中はフォークナー研究を中心にアメリカ合衆国の移民作家作品の特質について考察する。沼野はロシ

ア亡命作家作品を中心に考究する。西は、外地日本語文学作品とユダヤ系東欧作家作品の分析を行う。管はフランス語圏のカリブ海クレオール作家の作品と英語圏南米クレオール作家の作品研究を行う。谷口は、日独作家である多和田葉子や欧米出身の日本語作家作品を考察する。山本は、ハンガリー移民作家作品と移民を取り巻く歴史的状況の分析を行う。それぞれの移民作家たちに共通する諸問題として、離散と融合の歴史的文化的実相、言語文化的状況の差異と共通性、各国言語の規範性と逸脱、国民文学とマイナー文学、マルチカルチャーとインターカルチャー、ナショナリズムとポストコロニアリズムといった問題系が考えられる。各研究者は、それぞれの調査と研究の結果を持ち寄り、定期的に合同研究会を開催し、以上の諸観点からテーゼを導出しながら、世界文学における融合的表現形式の特質とその可能性について共同研究を行う。

4. 研究成果

当研究グループは 2009 年に出版した『越境する文学』（水声社）において、全員論文を寄稿した。境界を踏み越える文学は、旅や移動、探検、移民、亡命、巡礼といった空間的移動のみならず、ポストモダンやポストコロニアルな条件下で成立する混淆・交雑ないしハイブリッドな経験を含む。越境の文学は、それらを文化や意識のインタラクティブな過程として描出し、コスモポリタンな存在としての論理の創造を目指す。このような文学的営為を、英語圏、ロシア・東欧語圏、フランス語圏、ドイツ語圏、ハンガリー語圏、日本語圏における作家および作品論において解明しようとしたのが本研究書である。

また 2011 年にはその続編とも呼べる『反響する文学』（風媒社）を上梓した。共鳴し合う文学創造力の問題をさらに掘り下げ、フランス語圏、英語圏、ドイツ語圏、東欧語圏、日本語圏における越境的文学や移民・亡命文学の諸相を、他者性の保持とアイデンティティの揺れ、規範的な国民言語・文学への反抗と超克・革新、文化的衝突と融合のプロセス、混成的な表現形式の確立などの観点から再考察し、響き合うインターテキスト性のあり方を問い直した。

以上二つの共同研究成果の他に、各研究分担者は、個々の研究テーマを深化させ成果を発表した。

まず土屋は 2008 年度において、トルコ系ドイツ語作家を中心に移民文学から世界文学への架橋する歴史的視座を考察した。さらにシンポジウム「世界の移民・亡命文学の現状と可能性」を企画・運営し、それを冊子にまとめた。2009 年度はウィーンおよびベルリンに出張し、数名の越境作家たちにインタヴ

ューし、それを紀要に掲載した。また多和田葉子、エミーネ・エツダマ、ウラジミール・カミーナ、ウラジミール・ヴェルトリブ、ツェーラ・ツィラクを招待し、国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」を開催し、その報告記録集をまとめた。さらに『越境する文学』を水声社から上梓した。2010年度は、ウィーンとベルリンに再度出張し、越境作家たちにインタビューし、紀要に掲載した。また、研究成果の総括として『反響する文学』を風媒社から出版したほか、リービ英雄と毛丹青を招待してシンポジウム「越境文学の現在—日本語文学と中国語文学を中心に」を開催し、その記録集を編纂した。

田中は、2008年度は、中上健次とメキシコ系アメリカ女性作家サンドラ・シスネロスの語りを論文“Short Story Sequences and the Narrative Strategy of Minority Literature: Kenji Nakagami and Sandra Cisneros”で考察した。中上の短編集『熊野集』とシスネロスの短編集 *Woman Hollering Creek and Other Stories* を比較し、伝統文化が育む父権制ナラティブを、短編集というジャンルを用いた中上、シスネロスのテキストがどのように脱構築するか解明した。2009年度は、フォークナーと中上のトランスナショナルな語りの分析を、日本におけるフォークナー並びに西欧文学の受容と絡めて、*Global Faulkner: Faulkner and Yoknapatawpha 2006* (ミシシッピ大学出版) 中の1章を構成する“The Global/Local Nexus of Patriarchy: Japanese Writers Encounter Faulkner”にまとめた。2010年度は、『反響する文学』(風媒社)中の「フォークナーの『寓話』と越境」で、国家、軍隊、資本主義社会の権力構造を越境するための様々な言語的試みを、語りの分析によって明らかにした。さらに、中上とシスネロスで考察した神話的言説の批判的利用をフォークナーにも応用し、「<危険な女>と放浪する主人公——フォークナーの『八月の光』と中上の「不死」」の論文で追及した。

西は、日本人の海外移住地(とくにブラジル)の文学を「外地の日本語文学」として位置づけるための基礎的研究に主に従事した。「越境文学」に対する関心を、「欧米文学の最前線」として外部化するのではなく、また日本語による「越境文学」を最新の現代文学の兆候として単純に寿ぐのでもなく、むしろそれらに通底するものを、過去(とくに日本植民地主義期)の日本語文学のなかから掘り起こして、「越境文学」と「植民地主義」との関係洗い出すためである。論集『越境する文学』に寄せた論文「「外地」の日本語文学再考」では、ブラジル日本語作家の「越境性」をとりあげ、また細川周平との共編になる『うつろ舟』(松井太郎著)に寄せた解説

文「外地日本語文学の新たな挑戦 / 松井太郎文学とその背景」では、ブラジル日本語作家とブラジルのユダヤ系文学という二つの「移民文学」の比較を試みた。また最新の論文「日本語文学の越境的な読みに向けて」では、「「外地」の日本語文学」を英語圏・フランス語圏・ドイツ語圏などの「植民地文学」と比較することの重要性を包括的に論じた。

菅は2008年度、クック諸島およびニューメキシコ調査に加え中国・武漢での環境文学学会で「ダムによる水没」を主題とした発表。さらにパリ、ナントにてフランスの奴隷貿易をめぐる調査を行った。3月には学術振興会シンポジウムにて翻訳をめぐる招待発表を行った。2009年度は中国・大連、ニュージーランド、サモア調査。日本フランス文学会にてクレオール文学をめぐる発表を行い、単著として読書論『本は読めないものだから心配するな』(左右社)および旅行記『斜線の旅』(インスクリプト)を刊行し、後者は2010年度・読売文学賞(随筆・紀行賞)を受賞した。これ以外に土屋編『越境する文学』にエドゥアール・グリッサン論を寄稿した。またスタンフォード大学に詩人として招待され自作を英語・西語で朗読した。2010年度は詩集『Agend'Ars』(左右社)を上梓。詩集のかたちをとった現代移民文化論でもある。ハワイ諸島およびパリ、ストラスブールにて移民文化調査。2011年上半期、日本経済新聞にハワイ文化をめぐるコラムを毎週連載中。

谷口は、2008年度、多和田葉子とジャズピアニスト高瀬アキの公演「横浜発—鏡像」、同「飛魂」、多和田作品を演劇化したらせん館の「出島」公演に出かけ、多和田やらせん館にインタビューした。また多和田の戯曲『Pulverschritt Berlin』を、言葉遊びと鴉外像の創出という観点から観客を「発見」に導く戯曲として読み解いた。2009年度は、多和田と高瀬の公演「宇治拾遺物語」に出かけ、多和田へのインタビューを継続した。また前掲の『Pulverschritt Berlin』と水村美苗『私小説』、デビット・ゾペティ『いちげんさん』をインターテクスチュアリティの観点から比較検証し、国民文学を揺るがす越境文学の実例とその意味を検討した。2010年度は、ベルリンとウィーンに出かけ、多和田をはじめとする越境作家に面談した。また以下の多和田文学論を発表した。即ち、二人称に関する考察、教材化に関する考察、鳥の表象分析である。

山本の研究成果は以下の通りである。文学作品が生みだされるような越境空間の諸相とその社会の変容について、東欧移民の中でもアメリカ合衆国のユダヤ系とスロヴァキア系集団を取り上げて考察した。東欧出身の

ユダヤ系はアメリカの主流社会、ユダヤ系組織、各移民コミュニティの間で境界的な存在であった。そのため、エスニックな結合を基盤としながら、それを越えたコスモポリタン同盟を結成し、文化多元主義的な新たな価値を付与するコスモポリタン市民の有用性や可能性を提起した。しかし、この組織の構想と活動はヨーロッパ中心主義の認識やエスニック集団や階級の枠組みを乗り越えることができず、限界も有していた。同じく境界的な存在であるスロヴァキア系集団は、自集団の存在をアメリカの諸都市の政治的・文化的空間に、位置づけるため、祝祭を開催した。出身国の国民国家の枠組みとのずれや移民集団としての小規模な人口、政治力と経済力の脆弱さによって、祝祭開催には困難な問題があった。他方で、両大戦間期に盛んになった「スロヴァキア人の日」ではアメリカのナショナル・ヒーローや記念日を柔軟に取り入れ、アメリカ化を推進する機会ともなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 18 件)

西成彦「日本語文学の越境的な読み方に向けて」査読無『立命館言語文化研究』22 巻 4 号、国際言語文化研究所、2011、179-186.

Masahiko Tsuchiya: “Bemerkungen zum Thema “Identitaet, Migration, Transnationalitaet” 査読無『人間文化研究』13 号、2010、145-165

沼野充義「鼎談 世界文学を旅する」査読無『群像』65 (7) 2010、208-221

田中 敬子「「危険な女」と放浪する主人公—フォークナーの『八月の光』と中上健次の「不死」」査読無『人間文化研究』13 号、2010、85-96

菅啓次郎「島の水、島の火、島々」『文芸研究』査読無 明治大学文学部紀要 114 号 2010 77-83

山本明代「東欧移民のコスモポリタニズムと市民権—20 世紀初頭オハイオ州クリーヴランドにおける文化多元主義の試み」査読有『アメリカ史研究』第 33 号 2010 年 40-58

Masahiko Tsuchiya: “Keine Vorurteile gegenüber Worten, Distanz zur Sprache, magischen Kultur, Erschütterung der Sprache, gegen die monochrome Geschichte” 査読無『人間文化研究』12 号、2009、255-266

Masahiko Tsuchiya: “Mehrfache Identitaet, mangelnde Verwurzelung und die Fragwürdigkeit von Begriffen wie der klaren Zugehörigkeit” 査読無『人間文化研究』第 11 号 2009、155-166

沼野充義「発見され続けるナボコフ-「ナターシャ」と初期ロシア語作品の世界」査読無『群像』64(11)、2009、76-83

Mitsuyoshi Numano: “Toward a New Age of World Literature” 査読無 れにくさ 1 号 2009、188-201

西成彦「「外地」の日本語文学再考」査読無『植民地文化研究』8 号、植民地文化学会、2009、252-260.

菅啓次郎「思想の言葉 歩くこと、線の体験」査読無『思想』1038 2009 2-5

谷口幸代「多和田葉子『裸足の拝観者』をめぐって—先端的な教材を読み解く観点」査読有『日本文学』59 巻 9 号 2009、56-59

Masahiko Tsuchiya: “Von der Migrationsliteratur zur “interkulturellen Weltliteratur” 査読無『人間文化研究』10 号、2008、301-314.

Takako Tanaka: “Short Story Sequences and the Narrative Strategy of Minority Literature: Kenji Nakagami and Sandra Cisneros” 査読無『人間文化研究』2008 年 289-300

菅啓次郎「重力がほどかれるとき」『思想』査読無 2008 年 12 月号 47-51

谷口幸代「アルファベット「O」の笑い—Yoko Tawada『Pulverschiff Berlin 1. Für Luise』」査読無『人間文化研究』9 号 2008 年 155-168

Akiyo Yamamoto: Reorganization of Gender Relations among East European Immigrants in the United States: Realities and Representation 査読無 Nanzan Review of American Studies Vol.30 2008 年 121-130

〔学会発表〕(計 11 件)

土屋勝彦「ドイツ語圏移民作家における離散、越境、混淆」2010 年 12 月 22 日 明治大学文学研究科主催シンポジウム「文学と境界のダイナミックス 離散、越境、混淆」

菅啓次郎「言葉にならない、あの感じ」ワークショップ「20 世紀フランス文学と写真」東京大学文学部仏語仏文学科主催 2010 年 11 月 6 日 東京大学

菅啓次郎「独学と大学」シンポジウム「哲学への権利」明治大学文学研究科・教養デザイン研究科共催 2010 年 10 月 23 日 明治大学

Masahiko Nishi „Miyazawa Kenji and Global Justice”, in XIXth Congress of ICLA in Seoul (2010.08.17)

土屋勝彦「ドイツ語圏移民文学の諸問題」ドイツ現代文化研究会 2010 年 2 月 27 日 名古屋市立大学

Keiji Suga: Trans-Poetic Exchange A multimedia poetry show and colloquium on

Octavio Paz and Haroldo de Campos
2010 年 1 月 30 日 Stanford University

沼野充義「光源氏 vs. カラマーゾフ ―ロシアと日本 文学が映し出す互いの姿―」
ユーラシア研究所創立 20 周年「ロシア・ユーラシア経済」創刊 50 周年「ユーラシア・ブックレット」150 号刊行記念講演・祝賀会
2009 年 12 月 12 日東京大学 山上会館談話ホール

西成彦「日本文学の新拠点としてのブラジル (O Brasil como uma nova base da Literatura Japonesa)」, XX Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa, „Para além do Japão: Brasil, Canadá e França” (2009.08.27)

沼野充義「宇宙から呼びかける二羽のカモメ―現代日本小説におけるロシア人のイメージ」国際日本文化研究センター主催
2008 年 9 月 26 日ウラジオストク(ロシア) 国立極東大学

Masahiko Tsuchiya: Zur Migrationsliteratur im deutschsprachigen Raum – anhand von ein paar türkischen Autoren als Beispiel
アジア・ゲルマニスト大会研究発表 2008 年 8 月 29 日 金沢星陵大学

Akiyo Yamamoto: Reorganization of Gender Relations among East European Immigrants in the United States: Realities and Representations Nagoya American Studies Summer Seminars (NASSS) 2008 年 7 月 26 日 南山大学

〔図書〕(計 12 件)

土屋勝彦(編著)『反響する文学』風媒社
2011 年 264 頁

土屋勝彦(編著)シンポジウム「越境文学の現在―中国語文学および日本語文学を中心に(リービ英雄氏と毛丹青氏を迎えて)全記録 科研費報告書 2011 年 47 頁

土屋勝彦(編著)国際シンポジウム「アイデンティティ、移住、越境」報告記録集 科研費報告書(名古屋市立大学)2010 年 113 頁

管啓次郎『斜線の旅』インスクリプト
2010 年 275 頁

Sachiyo Taniguchi: Ivanovic, Christine (Hrsg.): Yoko Tawada. Poetik der Transformation, Mitarbeit Stauffenburg Verlag 2010 526 頁

土屋勝彦(編著)科研費「世界文学における混成的表現形式の研究」主催シンポジウム報告集「世界の移民・亡命文学の現況と可能性」名古屋市立大学人間文化研究科 CD-ROM 2009 年 119 頁

土屋勝彦(編著)『越境する文学』水声社
2009 年 306 頁

沼野充義(編著)『芸術は何を超えていくのか?』東信堂 2009 年 200 頁

沼野充義(共編著)『世界は村上春樹をどう読むか』文芸春秋 2009 年 360 頁

西成彦『世界文学のなかの『舞姫』』

みすず書房 2009 年 142 頁

管啓次郎『本は読めないものだから心配するな』左右社 2009 年 268 頁

Takako Tanaka: The Global/Local Nexus of Patriarchy: Japanese Writers Encounter Faulkner *Global Faulkner: Faulkner and Yoknapatawpha*, 2006. 2009 116-134 194頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~tsuchiya/Germany.html>

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/special2/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土屋 勝彦 (TSUCHIYA MASAHIKO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号: 90135278

(2) 研究分担者

田中 敬子 (TANAKA TAKAKO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号: 70197440

沼野 充義 (NUMANO MITSUYOSHI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号: 40180690

西 成彦 (NISHI MASAHIKO)

立命館大学・大学院先端総合学術研究科・教授

研究者番号: 40172621

管 啓次郎 (SUGA KEIJIRO)

明治大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号: 00328965

谷口 幸代 (TANIGUCHI SACHIYO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号: 50326162

山本 明代 (YAMAMOTO AKIYO)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号: 70363950

(3) 連携研究者

()

研究者番号: